

4. 参考資料(1)

日本における浄土庭園の構成と変遷

はじめに 右図は、杉本宏氏による「平安期浄土教寺院の変遷」を基本に、関連文献を参照し、日本の浄土庭園10例をほぼ年代順に配置したものである。なお、法成寺(図中A)と法勝寺(図中B)は十分な発掘調査成果もないため、推定復元図を用いた。以下、各事例の概要を記す。

A：法成寺(京都) 寛仁3年(1019)、藤原道長によって造営が開始された。東面する阿弥陀堂が園池の西側に建立された当初は無量寿院と称していたが、各堂宇が完成した治安3年(1023)以来、法成寺と呼ばれた。南門から延びる南北中軸線上に金堂と園池を配し、池は堂宇・廊によってコの字形に取り囲まれていたと想定される。

B：平等院(宇治) 平等院は藤原道長が入手した別業を、その子頼通が永承7年(1052)に仏寺に改めたものである。主要堂塔として、阿弥陀堂(鳳凰堂)・法華堂・多宝塔・五大堂・不動塔・護摩堂などが記録に残り、各堂宇は東面を基本とした。庭園は宇治川の旧河床・段丘を利用して造成され、池の西端に配した中島に阿弥陀堂(鳳凰堂)を配置した。造営後ほどなくその対岸に小御所が建てられ、視点場となる建物と視対象となる建物が中軸線をそろえた点に特徴がある。

C：法勝寺(京都) 承暦元年(1077)に白河天皇によって造営された。推定される伽藍は、南大門からの南北中軸線上に金堂・九重塔・講堂・薬師堂を配置し、阿弥陀堂を寺域西南に置き園池に東面させるもの。金堂とその両側から延びる東西廊がコの字形に南庭を囲み、その南に池を配置していたものと見られる。

D：毛越寺(平泉) 奥州藤原氏の二代基衡によって造営された。建立は基衡の晩年とされ、永治元年(1141)～保元元年(1156)に比定する説が有力である。伽藍構成は法勝寺の影響を受け、金堂円隆寺両脇から延びる回廊がコの字型に南庭を取り囲み、その南に園池を配置する。伽藍背景に塔山を位置づける点も特徴となっている。

E：観自在王院(平泉) 藤原基衡の妻によって仁平2年(1152)ころに建立された。大阿弥陀堂・小阿弥陀堂・普賢堂などの堂宇を配し、園池は滝石組・遣水・中島などを備えていた。阿弥陀堂が園池の西ではなく、北岸に南

面し、背後に金鶏山が位置する点も特色といえる。

F：白水阿弥陀堂(いわき) 磐城地方の領主であった磐城則道の妻で奥州藤原氏三代秀衡の妹の徳尼によって12世紀中頃に開かれた。永暦元年(1160)に創建された阿弥陀堂が園池に南面し、堂背後には経塚山がそびえていることから、観自在王院との類似性も指摘される。園池に大小2つの中島が配された点も特色といえる。

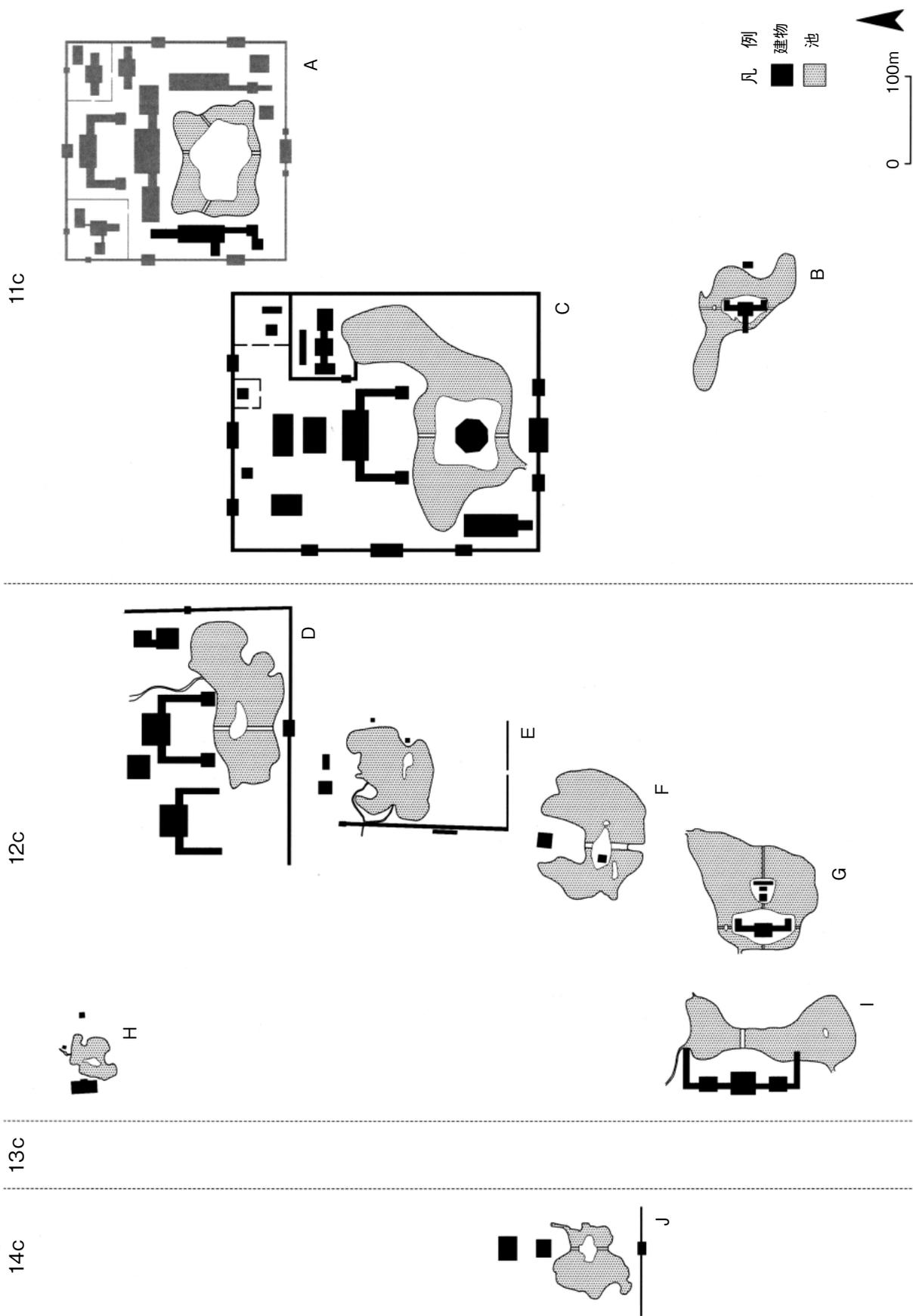
G：無量光院(平泉) 奥州藤原氏の三代秀衡によって12世紀後半に造営された。『吾妻鏡』によると、鳳凰堂の姿を模した阿弥陀堂をはじめ、ことごとく平等院にならったという。園池は阿弥陀堂および翼廊の前面に設けられ、中島を配していた。池も本堂翼廊の背後に続くことが判明し、平等院と酷似する庭園構成が確認された。また、中島上の建物群と阿弥陀堂とが東西の中軸線をそろえ、その西の延長線上に金鶏山が位置する。極楽浄土の光景を現出させることを目的に造営された浄土庭園のひとつの到達点を示すものとされている。

H：浄瑠璃寺(木津川) 寺の創建は永承2年(1047)であるが、嘉承2年(1107)に阿弥陀堂が建立され、久安6年(1150)に興福寺一乗院の恵信によって寺域や園池が整備拡充された。その後阿弥陀堂が園池西岸に移建され、三重塔が京都一条大宮より園池東岸に移建され、現在の伽藍配置が整った。三方が山に囲まれた立地も特徴である。

I：永福寺(鎌倉) 建久3年(1192)に開かれた永福寺は、阿弥陀堂と薬師堂を左右に従えた中堂、翼廊、釣殿、園池などによって伽藍を構成した。中堂は中尊寺二階大堂を模す。主要堂宇が東面して園池に臨む構成は無量光院にも類似する。園池は池底に相模川の緑色の玉石を敷き、池中に立石群や中島を備えたものであった。

J：称名寺(鎌倉) 北条実時の造営した持仏堂を母胎として、三方が丘陵に囲まれた地を選び、文応元年(1260)頃に成立したと考えられている。実時の孫・金沢貞顕は文保元年(1317)から元享3年(1323)まで、園池を含み伽藍の再整備を図った。金堂は園池に南面するように配置し、園池中心に中島を設けている。伽藍全体と背後の山との視覚的対応が考慮された立地を有する点も注目される。

(栗野隆／奈良文化財研究所)



図一 日本における浄土庭園の構成と変遷